



THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM NEWS

北海道大学 総合博物館ニュース

新しい常設展示「ユニバーシティ・ラボ」

総合博物館 第2期常設 展示オープンに向けて

2005年10月に第2期常設展示がオープンする。ここでは、その展示へ至る経緯と内容を紹介したい。

2001年にオープンした「創基125周年記念展示」から既に4年が過ぎた。総合博物館の2階南側展示室は、1999年に改修を終えたが、2004年まで本来の目的である展示室ではなく「収蔵庫」として使用されてきた。その理由は、展示室以外の収蔵・研究・教育スペースの改修を行う際に、収蔵学術資料が深刻なダメージを受けないよう、より安全な区域（改修済み区域）に保管するためであった。しかし、1999年以降、改修は進まず、現在の総合博物館は人目に触れる部分（展示室）の改修のみが済んだ状態である。つまり、重要な学術資料を収蔵するスペースや教育普及を行うスペースは、昭和4年の建設当時のままであり、昭和初期のたたずまいのする研究室を流用しながら収蔵庫等に利用する他に方法がないのが現状である。

改修が全くの未定であることから、2004



年に考古学資料を除く全ての学術資料を、最低限の空調施設等を備えた研究室の小部屋へと分散し移動させた。そして、2階南側の約600平方メートルが展示室として使用可能となった。（116平方メートルを占める考古学資料は、その位置で収蔵・研究展示を行うこととなった。）

さて、600平方メートルの展示スペースを、どのようなシナリオで展示公開するか。それらを定めるためのワーキンググループ（WG）が2004年6月に発足した*。数回に及びWG会議を経て、下記の方針とシナリオが示され、本年10月へのオープンに向け準備が開始されている。

タイトル：

「ユニバーシティ・ラボ -知を生み出し伝承する-」

コンセプト：

北海道大学は、130年にわたり、北の地、札幌・函館のキャンパスで、研究室を育んできた。研究室、ラボラトリーでは、日夜、教官、学生が実験を行い、議論をして、新しい知を創造してきた。そして、教官は院生・学生に、先輩は後輩に、その知識の体系を伝承してきた。

「ユニバーシティ・ラボ -知を生み出し伝承する-」の展示コーナーでは、北海道大学で行われている、研究方法の展示を行う。例えば、100年前の研究方法を再現し、同じ結果を得るための現在の最新の手法も展示し比較する。中には、研究作業中の研究者そのものを展示対象とする部分もある。研究方法の歴史を辿ることは、人類の発見の歴史を辿ることに等しいだろ

う。過去の発見の歴史は、次につくられる発見の歴史のステップとなる。研究方法の過去と現在の比較は、これからの研究に多くの示唆を与えることであろう。

（次ページにつづく）

目次

ページ1：	総合博物館第2期常設展示オープンに向けて（下澤楯夫・大原昌宏）
ページ2：	サスティナブル・キャンパス（池上重康）
ページ3：	海洋-海を科学する（松枝大治）
ページ4：	考古学ミュージアム・ラボ展示のねらい（天野哲也） COE展示コーナー（松枝大治）
ページ5：	サハリンモネロン島の自然（バルカロフ）
ページ7：	特別企画「シベリア・マンモス展」のおしらせ
ページ8：	第16回企画展示「人々の暮らしとオシラサマ信仰」（佐々木亨） 第17回企画展示「北大写真部写真展 日常展-身近な風景-」 第18回企画展示「北大教職員写真同好会 2004年作品展」 第19回企画展示「道具が伝える日本人の智慧とかたち-置戸町秋岡生活資料より-」（佐々木亨）
ページ9：	第10回国際シンポジウムと野外巡検（松枝大治・新井田清信） 第11回公開シンポジウム「ヤナギ科の系統・分類・学名」（高橋英樹）
ページ10：	共催企画「子供雪博士教室」（山崎敏晴・松枝大治） 客員教授紹介（高橋英樹）
ページ11：	平成16年10月から平成17年3月までにおこなった各種セミナー 9月までの企画展ポスター
ページ12：	平成16年10月から平成17年3月までの主な出来事/お知らせ

Jul. 2005

ISSUE 11

北海道大学総合博物館

2005年7月発行

3階

学術資料展示

材料／標本

2階

学術テーマ展示 「ユニバーシティ・ラボ」

方法

1階

学術テーマ展示

北大歴史展示

結果・歴史

展示構成（展示全体の中での位置づけ）：
 < 1階 >
 北大歴史展示学術テーマ展示（生命、循環、北方圏、科学技術）
 < 2階 >
 学術テーマ展示「ユニバーシティ・ラボ」サステナブル・キャンパス、海洋
 仮展示：サロン、COE パネル展示、考古学資料展示、学術資料展示（昆虫・植物）
 < 3階 >
 学術資料展示（アイランド・アーク、骨格標本）

以上のうち、太字部分は新しい展示である。それぞれの展示は階ごとに、1階は「北大の歴史」と「研究結果」、2階は「研究方法」、3階は「研究材料」と、テーマ別に区分けできる。
 3階展示室が未整備のため、展示構成は将来数年にわたり漸進的に移行する。2階の仮展示とされる学術資料展示などは将来3階へ移動する予定である。また、2005年度も引き続きWGにおいて2階部分の常設展示テーマの検討を行う予定である。今後とも学内の関連部局や関連教官の協力をお願いする。

下澤楯夫（平成16年度企画展示WG委員長／神経行動学）
 大原昌宏（研究部助教授／昆虫体系学）

*企画展示ワーキンググループ委員会委員（平成16年度）：下澤楯夫（委員長）・島山武道・池上重康・加藤克・井上高聡・長嶋和郎・鈴木正嗣・大宮学・西村紳一郎・寺沢浩一・脇田稔・五十嵐靖之・佐々木亨・大原昌宏・天野哲也

サステナブル・キャンパス

2階新規常設展示の導入部は「サステナブル・キャンパス」と題して、研究対象、あるいは研究活動の場として持続的に用いられてきた標本・資料ならびに施設を紹介するコーナーとしている。

北海道大学の歴史は、明治9(1876)年創立の札幌農学校まで遡る。創立期からの標本資料群として、植物園内の博物館所蔵の各種標本をあげることができ、プラキストンや阿部コレクション（いずれも複製）などを展示している。また、国の重要文化財（建造物）に指定されている旧第二農場施設群の建築図面を、創設期に購入されたプラウなどの農具とともに展示している。植物園、旧第二農場両施設とも一般に公開しているので、本展示に興味を持たれた方は、是非、現地を訪ねて、膨大な標本・資料にふれるとともに、開拓当初から継承される広大な空間を体験いただきたい。

ところで、明治初年のキャンパスは、一般に「時計台キャンパス」と言われる「札幌時計台」が位置する一画で、現キャンパ

スへ移転したのは明治37(1904)年のこととなる。爾來百余年、キャンパスが移転せず現在に至っていることも、北海道大学のサステナブル（持続可能）な側面を際立たせる。旧昆虫学及養蚕学教室（明治34年、現交流プラザ「エルムの森」）、旧図書館（明治35年）、旧林学教室（明治42年、古河講堂）は、植物園に移築された旧動物学教室（明治34年、現宮部金吾記念館）も含めて、国の登録有形文化財になっており、隣接する中央ローンやエルムの森とともに昔ながらのキャンパスの様子を今に伝えてくれている。本コーナーでは、これら施設的设计図面を展示するとともに、昆虫学・植物学・林学の系譜を展示する。

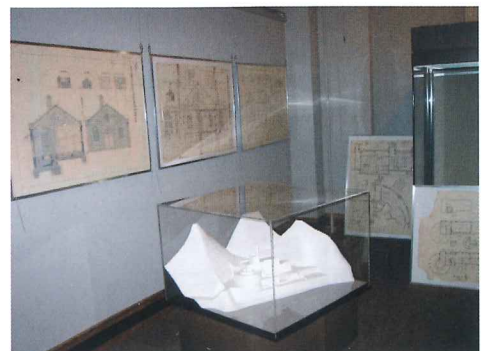
また、これまで1階に展示されていた旧農学教室（明治33年建築、現存せず）の模型を、このコーナーへ移設し、設計者中條精一郎自身が描いたと思われる設計図面を同時に展示している。この校舎は、昭和8年から始まる農学部改築工事により取り壊されたものであるが、この模型と対峙するように農学部本館計画案の模型を展示している。

現物の農学本館と見比べると、時計塔の上に装飾的な尖塔がのる点が異なる。鉛筆書きではあるが、細かく描かれた図面と比較しながら眺めるのも一興か。

展示の最後は、理学部の附属施設として建築された厚岸臨海実験所の模型と建築図面が位置する。この建築は最近、近代化運動（モダンムーヴメント）の観点からも高く評価されている。創建以来、用途を変えない、まさしくサステナブルな研究施設の代表例でもある。時代の最先端を具現した施設は、いつの時代においてもデザインが古びることなく、高邁な精神を継承する。

この展示を通して、北海道大学が継承し、持続してきた歴史の一部が、教育・研究という視点から、伝わることを期待したい。

池上重康（工学研究科助手／建築史学）



—海を科学する—

年前に太陽系第3惑星として形以降、次第にその様子を変えな

に至っている「水の惑星」地球でを始めとした多様な生命が育ま

す。の展示コーナーでは、そこで精

開されている科学研究に焦点を

と生命」を意識した研究展示を

います。コーナーでは、主に「宇宙から

見「海流」、「海底」、「海洋掘削

海」の生き物」にテーマを絞り、

れている先端的な研究手法の紹

とした展示を行う予定であり、

展示にとどまらず装置や実物

「海底の世界」

急激な世界の人口増に伴うエネルギー資源の著しい減少と枯渇問題に関り、主に現在熱い眼差しで注目を浴びているメタンハイドレートに焦点を絞り、その産状や属性、分布と生成過程等について、研究手法なども含めて展示紹介します。

併せて、将来的な海底鉱物資源として注目されている海底熱水鉱床産鉱石やMn団塊・コバルトクラスト等についても実物展示を行います。

「海底掘削 IODP」

日米主導で推進される統合国際深海掘削計画(IODP)では、平成17年夏に完成予定の地球深部探査船「ちぎゅう」の運用も予定されています。この掘削計画の実現により、地下圏に広がる未知の微生物圏の拡がりや生命の誕生の秘密解明、ガスハイドレートなどの新たな資源の発見と開発、地震発生のメカニズムの解明等、多くの研究成果が期待されています。

現在、IODP日本オフィスは北大にあり、多数の北大関係研究者が本プロジェクトに絡んで精力的な研究を展開しています。

本展示では、特にIODPプロジェクトの内容(研究テーマと対象、研究手法等)をパネルやビデオ映像等によって紹介すると共に、関連資料の閲覧等も可能にし、特に北大研究者が中心となって展開しているIODP計画を広く学内外に知らせる事を狙いとした展示を志向しています。

「海の生き物」

(新種のエピソードー魚類を例としてー)

私たちが住む地球は生命に満ちあふれており、現在約175万種の生物が知られています。しかし、これは予測生息数の数~数10パーセントに過ぎないと見積もられており、地球上の生物の大半は未知の種類(新種)であると考えられています。

海洋には様々な生物が生息していますが、本展示では最も人間に親しみのある「魚類」について、新種が発見され、発表されるプロセスを具体的な例を挙げながら実物展示と共に紹介します。

北海道大学には19万点を超える魚類標本が所蔵・保管されていますが、このうち約850点がタイプ標本に指定され、これま

(海洋天然物化学と生物分類学のコラボレーションーlaurencinの発見とウラソゾの種内分化ー)

40数年前のある日、専門分野の異なる3人の北大教授の雑談を発端に、後の世界中の有機化学者が参入して海洋天然物化学の一大分野に発展した、ソゾという海藻の含ハロゲン化合物の研究が始まりました。

単に学問的に興味深い化学構造を持つ物質が多数発見されたというだけでなく、この研究をきっかけとして、現在日本海で起きつつある生物の進化(種内分化)に関する興味深い事例が判って来たり、これらの化合物の中から院内感染防止の切り札として期待される抗菌物質が見つかるなど、様々な広がりを見せています。

実物標本や実験装置を用いた展示により、これらの研究を紹介していきます。

(海鳥ー水中と空中を自由に飛行する海鳥たちの生活を探るー)

海には、空中だけでなく水中と空中の両方を飛行する海鳥がいます。

それらの生態と習性に光を当て、特にその知られざる策餌旅行、水中での行動様式、潜水泳法等の詳細な紹介とその研究手法について、ミズナギドリ、ペンギンとウミガラスの例を示しながら実物(剥製)と共に展示します。

以上の展示は、北大研究者によって現在も世界各地で展開されている研究成果とその研究手法の紹介コーナーとなっています。一般市民に見てほしいのはもちろんですが、将来の自分自身の具体的な研究イメージをつかめないでいる北大の新入生(フレッシュマン)・学部生にも是非見てもらいたい展示です。

松枝大治(研究部教授/鉱物学・鉱床学)



考古学ミュージアム・ラボ展示のねらい

「オホーツク文化研究はどのように深められてきたか」

1. 経緯

古代、オホーツク海南岸に展開した海洋文化・オホーツク文化の調査・研究は、東大、北大、筑波大（旧東京教育大）、北海道開拓記念館それにサハリン大学が中心になって進めてきた。

北大では2001年の総合博物館設立を機に、学内のオホーツク文化にかかる資料を集約一本化して保管・活用することにした。この結果、総合博物館は5大オホーツク文化遺跡コレクション（礼文島香深井1遺跡、礼文島元地遺跡、稚内市オンコロマナイ遺跡、北見枝幸町目梨泊遺跡、網走市モヨロ貝塚遺跡）を擁するようになった。これは現在国内外最大の規模であり、研究者の利用が絶えない状況にある。

2. 展示の方針

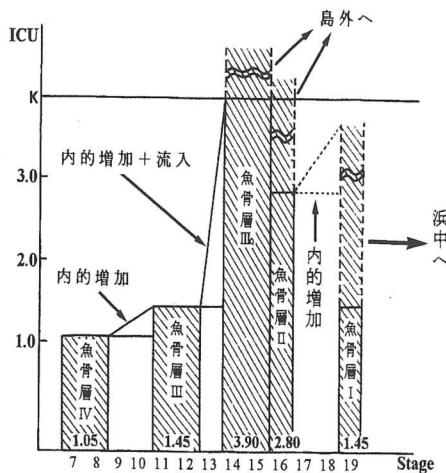
こうしたオホーツク文化研究をリードしてきた北大の調査・研究成果を検証して、何が明らかにされ、何が課題として残されているかを明示する。その際、定説化した成果だけでなく、論争中のテーマも取り上げるようにする。

具体的には、すでに報告書を刊行して成果を公開済みの香深井1遺跡、オンコロマナイ遺跡を中心に展示し、あわせて、報告書刊行準備中の元地遺跡、目梨泊遺跡、モヨロ貝塚遺跡の位置づけ・意味づけを行う。

また収蔵庫・分析室の一部を公開する。来館者はここで大学における考古学研究の一端に触れることができ、考古学への興味を深め、親しみを増すことになるであろう。



骨鏃が射込まれた人脊椎骨（モヨロ貝塚遺跡）。骨鏃はこれまで狩猟用具と考えられてきた。



ICU (獲得資源量=カロリーの季節変動) から見た香深井1遺跡集落・礼文島オホーツク文化社会の変遷 (小野裕子, 1998 から)

3. 展示構成 (視角)

1. 生産 (生業の季節性=季節的変動)
2. 社会 (集落、キャンプ、地域社会、地方社会、異集団・国際関係)
3. 信仰 (動物儀礼)
4. タイトル
 - a. 集落遺跡との出会い—オンコロマナイ遺跡から香深井1遺跡へ
 - b. 魚骨層の分析—形成のメカニズム・方向性、資源の季節変動
 - c. 集落構成—敷地の設定、分村
 - d. 人骨に見るオホーツク人の生活史—労働、食性、戦闘など
 - e. オホーツク人とは誰か、その系統—ウリチ民族説、ニヴフ民族説、サハリン・アイヌ説ほか
 - f. 信仰—クマ送り、動物儀礼
 - g. 社会組織—地域集団、地方集団、オホーツク文化世界
 - h. 異集団との関係—東アジア世界の中で
 - i. オホーツク文化研究史
天野哲也 (研究部助教授/考古学)

COE 展示コーナー

21世紀COEプログラムは、「大学の構造改革の方針」(平成13年6月)に基づき、文部科学省の新規事業として平成14年度から「研究拠点系成否補助金」が措置されたものです。

我が国の大学が、世界トップレベルの大学と競合して教育及び研究活動を展開してゆくためには、第三者評価に基づく競争原理により競争的環境を一層醸成し、国公私を通じた大学間の競い合いがより活発に行

われる事が重要です。このプログラムは、我が国の大学に最高水準の研究拠点を形成し、研究水準の向上と世界をリードする創造的な人材教育を図るため、重点的な支援を行い、国際的競争力のある個性輝く大学作りを推進する事を目的としています。

北大では、これまで平成14年度4件、同15年度6件、同16年度2件の合計12件が採択され、現在それぞれが活発な研究プロジェクトの推進を行っています。

本展示コーナーでは、北大で採択された各COEプロジェクトの内容をそれぞれ3枚のパネルで紹介し、併せてパソコンによる各プロジェクトのホームページや研究成果等の紹介を行うと共に、各プロジェクトで発刊した各種印刷物等について、テーブル・椅子を用意して机上での閲覧や関係者によるその場での面談等も可能にしています。展示公開開始以降は、機会を見ながら博物館セミナーの一環として、広く一般市民・学生を対象とした普及講演等も実施してゆく計画です。以下に北大のCOEプロジェクト12件を記します。

「バイオとナノを融合する新生命科学拠点」(長田義仁/理学研究科)・「知識メディアを基盤とする次世代ITの研究」(田中譲/情報科学研究科)・「心の文化・生態学的基盤に関する研究拠点」(山岸俊男/文学研究科)・「生態地球圏システム激変の予測と回避」(池田元美/地球環境科学研究科)・「人獣共通感染症制圧のための研究開発」(高島郁夫/獣医学研究科)・「特異性から見た非線形構造の数学」(小澤徹/理学研究科)・「流域圏の持続可能な水・廃棄物代謝システム」(渡辺義公/工学研究科)・「新世代知的財産法政策学の国際拠点形成」(田村善之/法学研究科)・「新・自然史科学創成」(岡田尚武/理学研究科)・「スラブ・ユーラシア学の構築」(家田修/スラブ研究センター)・「トポロジー理工学の創成」(丹田聡/工学研究科)・「海洋生命統御による食糧生産の革新」(山内皓平/水産科学研究科)

松枝大治(研究部教授/鉱物学・鉱床学)



<寄稿> サハリン モネロン島の自然

モネロン島（別名カイバ、海馬島、トドモシリ）は、北緯46度よりやや北、日本海のサハリン南西端に位置している。サハリンからは幅50km足らずの海峡で隔てられている。面積はわずかに約30平方キロ。地形は大部分は山勝ちだが、標高は400mちょっと（スタリツコヴォ山、旧名台南山）しかない。島の周囲には多くの小島や岩礁があり、海獣や鳥の格好のすみかとなっている（図1）。晴れた日にはモネロン島は対岸のサハリンから良く見え、水平線に浮かぶ小さい丘のようである。

この小さい島の海岸は大部分が、黒い噴出岩で出来た急峻な崖になっている。岩質の色のために、天気の良い日には島々は、灰色の海を背景に黒と緑色のコントラストとなって、やや陰鬱に見える。海岸の崖には、波打ち際に、狭い幅の砂浜あるいは小石交じりの浜ができていて、東海岸の入り江でのみ、その幅は25~30mになる。西側では、浜は岩塊となるところもある。この、今は無名の広い湾（日本名は台南湾）の岸から500mぐらいのところには、高さ70mの岩がそそり立っている。茶色の玄武岩でできた、水の滴る岩壁である。

島の斜面には深い峡谷がいくつかあって、山に源を発する小さな川の通り路となっているが、この小川は最後は滝になることが多い。有る程度幅広い峡谷は島の北部・南部に見られる。これらの峡谷には、長さは比較的短い、このような島にとってはかなり大きい川が流れている。ウソヴァ川（大沢？）とモネロン川（泊皿）である。これらの川の河口は、高さ8mのところにある。

モネロン島の側を対馬暖流が流れており、その影響で島の気候は暖かい。冬期には、日本海と間宮海峡の凍結しない海域が大陸からの寒気団を温めるため、この地域は冬にも夏にも穏やかな気候である。最暖

月は8月である。雨は暖かい月に最も多いため、夏は霧や小雨が多い。湿度は島ではかなり高く、特に7月は高い。一年を通じて、特に冬季や季節の変わり目には、島は強風の影響を受ける。最大風速は44m/秒に及ぶこともある。強風のため、夏季には実質的な気温は下がり、冬季の積雪分布は本質的に風の影響を受ける。

モネロン島の動植物は素晴らしく、驚異である。島にはトドやアザラシなどの海獣の大規模な群棲地や、海鳥の大コロニーがあり、夜になってもざわめきは静まらない。さえずる小鳥も多い。サハリンから飛んできたらしいサギもよく見かける。すばしこいトカゲはごく普通に居り、あちこちで見られる。しかし、長さの短い川には、魚はいない。筆者は植物学者で、植物界の方が馴染みがあるので、植生の特徴について詳しく見ていこう。

地形や気候は、モネロン島の植生の性格・配置に本質的影響を与えている。草原やダケカンバ *Betula ermanii* 林は、島の山勝ちな風景とは切り離せない要素である（図2）。明瞭な海洋性気候の影響で、島の大部分は草原・低木群落に覆われ、その組合せ・構成要素は独特な場合が多い。草原は島の面積の50%以上の割合を占め、森林はわずか20%程度である。開花期の草原は特に鮮やかだ。ここには、エゾゼンテイカ *Hemerocallis esculenta*、ツリガネニンジン *Adenophora triphylla*、オオウサギギク *Arnica sachalinensis*、トウゲブキ *Ligularia hodgsonii*、イワノガリヤス *Calamagrostis langdorffii*、エゾウスユキソウ *Leontopodium discolor*、オオカサモチ *Pleurospermum uralense*、アツモリソウ *Cypripedium macranthon*、ハクサンチドリ *Orchis aristata*、タチギボウシ *Hosta rectifolia*、アキカラマツ *Thalictrum minus*、ヤナギラン *Chamaenerion angustifolium* など、北海道やサハリンに特徴的な植物が生育している。

島には、2~3mの高さになるような高茎草本も、山麓や、盆地、流域周辺に広く分布している（図3）。最も特徴的な代表種



図3. 高茎草本（エゾニュウ、アキタブキ、オニシモツケ）の草原の一部

としては、オニシモツケ *Filipendula camtschatica*、エゾニュウ *Angelica ursina*、エゾノヨロイグサ *Angelica sachalinensis*、アキタブキ *Petasites japonicus* subsp. *giganteus*、ヨブスマソウ *Cacalia hastata* subsp. *orientalis* が挙げられる。特にその大きさと茎が中空なことから、ロシアで“熊の笛”とよばれるエゾニュウ *Angelica ursina* のサイズは驚くべきものである。高茎草本群落の下にはザゼンソウ *Symplocarpus renifolius*、カラフトヒロハテンナンショウ *Arisaema sachalinense*、ナニワズ *Daphne jezoensis*、オオバナノエンレイソウ *Trillium camtschatcense*、コケイラン *Oreorchis patens*、コタニワタリ *Phyllitis japonica* がよく見られる。

島では到る所にダケカンバ林やミヤマハンノキ *Alnus maximowiczii* の低木林がある。山頂近くや分水嶺の尾根といった、強風の影響が特に強く長期にわたる所では、ダケカンバ林はまばらになり、丈も低くなる。そういう場所の木々はひどく曲がり、幹は横に広がっている。

常緑針葉樹林は非常に限られた面積でしか生育していない。そういう林は冬の冷たい強風の当たらないところに出てくる。ここではエゾマツの小群落を稀にみかけるだけである。中には幹の直径がほぼ40cmになる木々もある（図4）。別の針葉樹であるトドマツの方は山の斜面に植樹されているだけである。

モネロン島には、サハリン南西部や北海道の広葉樹林によくみられるコナラ属 *Quercus*、トネリコ属 *Fraxinus*、ニレ属 *Ulmus* などの「南方系」の樹種が生育していない。しかし、特に島の東部（キタコタン盆地、現在のクラスナヤ）の、山の谷間や丘陵地には、キハダ *Phellodendron sachalinensis*、エゾヤマザクラ *Prunus sargentii*、ヤマグワ *Morus australis* のかなり大きな木があり、一本で立っていたり小群落をつくっていたりする。島の南部ではこれらの種に加えてアカイタヤ *Acer mono* var. *mayrii* があらわれる。つる植物はかなり普通にみられる。



図1. Chuprova 湾（旧名宇須）の埠頭



図2. 島の東部のダケカンバ、常緑針葉樹、草原の混生した茂み

ヤマブドウ *Vitis coignetiae*、ミヤママタタビ *Actinidia kolomikta*、チョウセンゴミシ *Schisandra chinensis*、ツルウメモドキ *Celastrus orbiculata*、ノブドウ *Ampelopsis brevipedunculata*などが、低木の茂みや高茎草本にからみついている。モネロン島ではイチイ *Taxus cuspidata*は非常に稀である。

低木群落は、モネロン島では草原植生について大きい面積を占める。この群落はダケカンバ林内、斜面、崖地、川谷、盆地、色々な草の混じった草原など、ほとんどどこにでも出てくる。最もよくみかける低木としては、ミヤマハノキ *Alnus maximowiczii*、エゾニワトコ *Sambucus sieboldiana*、バッコヤナギ *Salix caprea*、マユミ *Euonymus sieboldiana*、ハイヌツゲ *Ilex crenata*、エゾヒヨウタンボク *Lonicera glehnii*、ケヨノミ *Lonicera caerulea*、ウコンウツギ *Weigela middendorffiana*、ミヤマイボタ *Ligustrum nipponicum*が挙げられる。

モネロン島の山の斜面の丘陵地には、色々な種類のササが混生したササ原ができていて(図5)。ササ原の高さは1mまでのことが多いが、条件がいいと1.5mに達する。スタリツコヴォ山の南のなだらかな斜面には広大な面積のササ原がみられる。北東斜面ではササ原はあまり発達せず、代わりにススキ *Miscanthus sinensis*が海に面した急斜面に生えている。

崖地や、崖状の岩の露頭が多いことから、島には種々雑多な性質の岩崖地の植物が広く分布しているが、種数はあまり多くない。岩の急斜面や岩棚(海岸から山頂まで)には匍匐状低木のミヤマビャクシン *Juniperus sargentii*が広がり、所によりかなり広大な面積を占める(特にAsahi山)ことがある。時にリシリビャクシン *Juniperus sibirica*のこともある。崖や岩鍾地にはイブキジャコウソウ *Thymus*



*semiglaber*の大群落ができる。ここには、アサギリソウ *Artemisia schmidtiana*、ヒロハウラジロヨモギ *Artemisia koidzumii*、エゾウスユキソウ *Leontopodium discolor*、フタマタタンポポ *Crepis hokkaidoensis*、エゾイヌナズナ *Draba borealis*、チシマギキョウ *Campanula chamissonis*、カラフトゲンゲ *Hedysarum sachalinense*、キクバクワガタ *Veronica schmidtiana*、ネムロシオガマ *Pedicularis schistostegia*、シコタンソウ *Saxifraga cherlerioides* var. *rebunshirensis*、ヤマハナソウ *Saxifraga sachalinensis*、ウシノケグサ *Festuca ovina*、イワベンケイ *Rhodiola rosea*、エゾツツジ *Rhododendron camtschaticum*もよくみられる(図6)。

海岸には、北海道でよくみられるハマニンニク *Leymus mollis*、ハマエンドウ *Lathyrus japonicus*、カラフトイチゴツナギ *Poa macrocalyx*、ハマハコベ *Honkenya oblongifolia*、ハマベンケイソウ *Mertensia maritima*などがある。テンキグサ *Leymus mollis*は海岸だけではなく、スタリツコヴォ山の北斜面の草原にも海拔400mの高さにまで生育する。

湿潤な気候にもかかわらず、モネロン島には沼は断片的にしかない。以前沼だったところは大部分が草原化している。湿原の植物のオオカサスゲ *Carex rhynchophysa*、ヤラメスゲ *Carex lyngbyei*、ミズバショウ *Lysichiton camtschaticense*、ヨシ *Phragmites australis*、エゾアカバナ *Epilobium montanum*などが、たまに水路の岸の沼や浅い小湖に生えていることがある。

モネロン島は、特に日本の支配時代にかんがりの程度開拓されていた。海岸では海獣の狩猟や漁労が行われ、崖では海鳥の卵の採取が行われていた。島には6つの大きな集落があり、小さい面積にしてはかなり密な道路網ができていたし、耕作も行われていた。道路や四角い耕作用地の跡は現在でも方々の斜面にみられるが、低木や雑草が生い茂っている。人とともに、島には外来種も持ち込まれた。現在、これらの植物は昔の集落跡によくみられるが、時に自然植生中に見られることもある。

モネロン島の植物調査は日本の研究者によって着手された。島で標本採集を行ったのは、三宅勉(1906年)、菅原繁蔵(1925, 1927~29, 1933~1935年)、木本氏幹、村山大記、竹江ゴロウ(1931年夏)、他である。この時期のモネロン島の植物相の総括的資料は"Florula of the Island Kaibato(Todomoshiri)"(Tatewaki and Kimoto

1932~1933)であり、その中で著者らは353種を掲載している。

ロシアの研究者のうち、最も早くモネロン島を訪れたのは、有名な植物学者且つ地理学者Popov M.G.であり、1949年であった。後日、その植生についての有る程度詳細な特徴を発表した。その後、植物相・植生・有用野生植物の研究の目的で、ロシアの研究者が幾度となく訪れた。ここで研究を行った研究者は、Bukhteeva A.V.(1957年)、Chernyaeva A.M.(1960年)、Egorova E.M.(1964年)、Aleksieva L.M.(1973年)、Stepanova K.D.(1973, 1975年)、Abanjina M.V.とGoncharova S.B.(1991年)その他大勢である。モネロン島の植物種リストは、ロシアの植物学者により本質的に補充された。

モネロン島はサイズが小さくエコトープが比較的限られているにもかかわらず、島の植物相には十分多くの植物種が生育している。ここには480種の植物があるが、これはサハリンの植物相の3分の1に相当する。構成としては南サハリン・北海道の植物相に近い。しかし、モネロン島にはトリカブト属 *Aconitum*、オニイチゴツナギ属 *Arctopoa*、サンザシ属 *Crataegus*、リンゴ属 *Malus*、マツ属 *Pinus*、アジサイ属 *Hydrangea*、サンカヨウ属 *Diphylleia*、イブキヌカボ属 *Milium*などの属の植物が無く、種としては、広域に一特に南サハリンに一分布するチシマイチゴ *Rubus arcticus*、ヤブニンジン *Osmorhiza aristata*、ホタルサイコ *Bupleurum longiradiatum*、ヒラギシスゲ *Carex augustinowiczii*、エゾノコウボウムギ *Carex macrocephala*、クロマメノキ *Vaccinium uliginosum*、マルバシモツケ *Spiraea betulifolia*、チシマヒヨウタンボク *Lonicera chamissoi*など多くの種が欠けている。ここにはハイマツもない。島が南部に位置することを考えると、ハイマツには少なくとも標高1000mが必要であろう[高橋注:モネロン島の南に位置する礼文島では低地からハイマツが生育している]。モネロン島には淡水に生える水草も生育



図5. 島の南部のウツヴァ川(旧名大沢)上流のササ原

図4. Chuprova 湾の崖下のエゾマツ林



フトゲンゲー 岩崖地植物の代表の1

島の陸上植物相・動物相は、更にサハリンから切り離されるまでいた種を基本として、近接する偶然に入った少数の種もあわ

島の本来の植生、特に森林植の影響で大きく変化したことを示さなければならない。人的撹乱の跡から山頂までほぼ到る所にみられる島の森林は、恐らくかつて

は現在よりも大きな面積を占めていただろうが、人により伐採されたり火事で消失したりしたのだろう。島の所々で伐採後の切り株をみかける。

1997年モネロン島には州立海洋公園“モネロン島”が創設された。この島の植物・動物相は現在保護下にある。しかし、ロシアや外国の観光客の訪問に対して、公園は開放されている。

筆者はモネロン島を2度にわたって訪れることができた。最初は2001年8月23・24日、サハリン島の生物多様性研究に関する国際サハリンプロジェクト (ISIP) に参加した時である。しかしこの時は、科学調査船から1日限りの上陸が2回行われただけだった。筆者の他には、ワシントン大学 (北米・シアトル市) の2人のアメリカ人植物学者

図7. 2004年モネロン島調査隊参加者 (左から右へ: 筆者、Dr. Evgeniy A. Makarchenko (水生生物学者、水棲昆虫)、Dr. Arkadiy S. Lelej (昆虫学者)、Dr. Victor V. Bogatov (軟体動物学者、陸生・淡水生貝類)、Dr. Sergei Yu. Storozhenko (昆虫学者))。

Suzanne Joneson と Kari Stiles が調査を行った。2回目は最初の時よりも長く2004年7月13～28日の日程で、プロジェクトの調査を継続していたロシアの小グループ6人 (図7) であった。植物、キノコ、陸生・淡水生貝類、昆虫の大量の興味深い試料が集められ、現在、標本作成作業が進行中である。この驚異の小島には、1度行ったらまた訪れたくなるのである。

バルカロフ V. Y. (客員教授 (平成 17 年 1 月 15 日～4 月 15 日) / 植物分類地理学) 和訳 (福田知子 / 京都大学大学院)



特別企画「シベリア・マンモス展」のお知らせ

博物館では、第21回特別企画展示「シベリア・マンモス展」を平成22日から8月27までの予定で開催します。

本展で1週間だけ展示されたマンモス標本を特別に借り受けて公開し、これまで未公開の石器類や象牙も追加展示し、マンモス絶滅に関する企画展示としています。

日にはオープン・セレモニーが

行われ、続いて午後からクラーク会館で記念講演会が開催されました。北大低温科学研究所の福田正己教授による「マンモス絶滅の謎に迫る」、日本テレビの中谷聡氏と松田猛司氏による「極北シベリアに幻の冷凍マンモスを追って」の講演が行われ、来聴者は300名以上と好評でした。

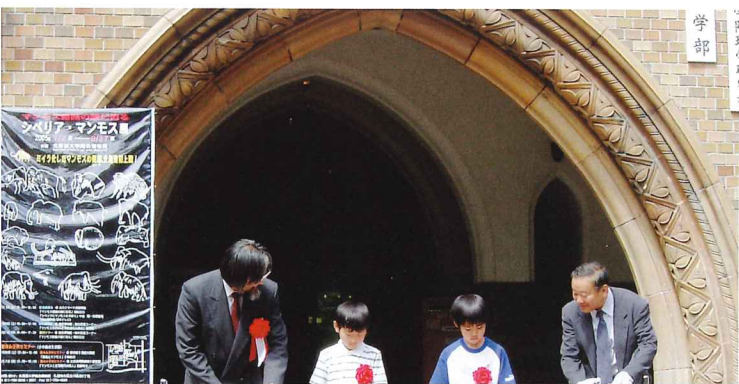
展示期間中には、さらに以下の講演会、子供セミナー等が計画されています。

7月23日: 学術講演会「マンモスのDNAと系統進化の探求」(増田隆一 / 北大創成科学研究機構)

7月30日: 子供セミナー「恐竜とマンモス」(小林快次 / 北大総合博物館)

8月3日: 子供セミナー「マンモスと氷河時代の狩人」(加藤博文 / 北大文学研究科)

8月21日: 展示ツアー「マンモス絶滅の謎に迫る」(福田正己 / 北大低温研究所)



第16回企画展示 「人々の暮らしと オシラサマ信仰」

第16回企画展示を平成16年10月26日から11月14日まで開催しました。文学研究科佐々木亨研究室のゼミ生を中心に企画・準備されたものです。2004年1月からゼミ生が各々の展示企画を提出し、コンペで選ばれたものが元になっています。

今回の「オシラサマ信仰」というテーマは、ゼミ生の1人、上原周子が修士論文のテーマとしてフィールドワークし研究しているものであり、彼女の成果を元に、ゼミ生全員が分担して展示制作を行いました。

た。一般的に、学術研究の成果は論文という活字で発表されますが、展示という媒体を活用することによって、多くの人々に知ってもらうことができると考えています。

本展示では、「東北地方にみられ、現在でも人々の中に生き続けている民間信仰」ということをベースとして紹介するものとなりました。特に、上原が現在行っているフィールドワークで得た、現在の信仰の様子を盛り込みました。これには、オシラサマ信仰は、過去のものではなく現在も人々の中に生き続けているという意味が込められています。

具体的には、展示室を大きく4つのゾーンで構成し、エントランスには青森

から室蘭に移住してきた方の家に所蔵されているオシラサマを置きました。概説ゾーンでは、実物展示はもとより文献から過去の信仰の様子を、フィールドゾーンではフィールドワークで収集した映像から現在の信仰の様子を紹介しました。さらにプレイゾーンとして、床に敷き詰めた東北地方の地図から信仰の広がりを感じ、オシラサマ(レプリカ)に触れることのできる形をとりました。

この展示に来場して下さった方々が、東北地方を旅した時に、オシラサマ信仰というものがあるという事を思い起こしてもらい、オシラサマに興味を持っていたら幸いです。

佐々木亨(資料部研究員/博物館学)

第17回企画展示 北大写真部写真展 「日常展-身近な風景-」

第17回企画展示「北海道大学写真部 日常展-身近な風景-」を平成16年11月23日から平成17年1月10日まで、3階企画展示室で開催しました。15年度に本博物館で行われた「北海道大学写真部写真展

-北大の情景-」が好評だったのを受け、その2回目として開催されたものです。

展示室には、北海道大学の四季、建造物、学生生活などを学生の視点から捉えた写真が50点以上展示されました。白黒写真を中心に、カラー写真やデジタルカメラによる写真も展示され、日曜日には部員が説明役として展示会場に待機しました。

博物館を訪れた市民や観光客にとって

は、北大をより身近に感じられる企画だったと思います。特に北大キャンパスの情景や日々の研究室風景をとらえた写真は好評でした。

なお、展示が行われた3階企画展示室は、本博物館が主体の「企画展示」が開催されていない期間においては、学内の学生・教職員サークルの発表の場としても機能しています。

第18回企画展示 北大教職員写真同好会 「2004年作品展」

第18回企画展示「北海道大学教職員写真同好会 2004年作品展」を平成17年1月25日から2月13日まで、3階企画展示室で開催しました。今回の企画展示は、北大教職員写真同好会の2004年活動報告を写真作品という形で発表したものです。「風景」、「人物」、「動物」、「スナップ」等、多様なジャンルの作品を32点選定し、一部の作品をポスターサイズの大きさをプリントすることで、より印象に残る展示方法を試みました。

また、特別企画展として「LEGO写真展」を同時に開催しました。これは「レゴ

ブロックの目線で地球を歩く」と題して、レゴ人形がフィールド調査をしている様子を写真に収めたものです。実際にレゴ人形や採集した岩石や鉱物、化石等も展示し、地球惑星科学分野がより身近に感じられたと思います。

開催期間中は多くの方々にご来場していただき、アドバイスや感想もいただきました。その一部を紹介します。

- ・子猫の写真に魅かれて見に来ました。どの写真もとても美しく、ゆっくり楽しませて頂きました。
- ・LEGO展、違う視点で見ることのおもしろさ、大切さを教えていただきました。また、実物を見るより写真の方が命があるように感じました。
- ・こんにちは。東京から来ています。大学はすごくステキなところですね。感動



です。

- ・「命」こんなもの撮るなんて発想がいい！他の命を取って人間は生きている。命は感動！！

なお、写真同好会では写真素材の提供を行っています。北大構内風景でお探しの写真があったら、以下のアドレスまで照会してください。

photocl@jimuhokudai.ac.jp

モノの智恵」・「かくれたモノの智恵」と3テーマをもとに展開しました。

来場された方々には、展示内容を興味深くご覧いただけたと考えています。

「秋岡生活資料」の整理はまだまだ未完成です。本企画展を第一歩として、今後とも北大と置戸町の間を維持し、調査と展示を行うことができると考えています。

佐々木亨(資料部研究員/博物館学)

第19回企画展示 「道具が伝える日本人の 智恵と私たち-置戸町 秋岡生活資料より-」

第19回企画展示「道具が伝える日本人の智恵と私たち-置戸町 秋岡生活資料より-」を平成17年2月26日から3月27日まで

で、3階企画展示室で開催しました。

常呂郡置戸町に所蔵されている「秋岡生活資料」の一部を展示したものです。

「秋岡生活資料」とは、先人の知恵と私たちとを、「人間の手の可能性と日本の木工芸の文化」として追求し続けた、工業デザイナーの故秋岡芳夫氏が収集した約18,000点の生活道具のコレクションです。

展示は、「つかうモノの智恵」・「つくる

ルプロセス（口頭9件）、第2部：幌満かんらん岩（口頭5件）、第3部：特別トピックス（口頭4件）、第4部：ポスター（2件）に分かれ、予定時間を大幅に超過しての活発な質疑と討論が交わされました。

発表内容は、D.G.Green 客員教授による最新のマントルプレュームに関わるマグマ成因論を皮切りに、世界各地のかんらん岩・オフィオライトの岩石学と成因論や、各種同位体地球化学的検討、幌満かんらん岩体研究における課題と展望、造岩鉱物学的検討及びマグマチャンネルの形成と起源、さらには蛇紋岩成因論や地震学的見地から見た上部マントルなどのトピックスも紹介されました。

シンポジウム終了後には、大学近くのレ



ストラムで多数の参加者を交えて懇親会が催され、昼間の討論をさらに持ち越して夜遅くまで熱心な議論が続けられ、盛会のうちにシンポジウムを終えることができました。

シンポジウムの翌日からは、道央の様似町（様似支援センター宿泊）において、1泊2日（11月6～7日）の日程で、主に幌満川ルートにおける観察を目的とした「幌満かんらん岩」巡検が催され、4名の外国人を含む総勢約20名による現地観察会が実施されました。現地では、世界的にも数少ない新鮮で保存の良いかんらん岩露頭を前にして、特にマグマの上昇・移動によって作られる上部マントルかんらん岩中のマグマチャンネルの生成プロセスに関する熱心な議論と意見交換が行われ、極めて有意義な巡検となりました。

松枝大治（研究部教授／鉱物学・鉱床学）
新井田清信（資料部研究員／マグマ科学）



含める説が支持されました。また、ヤナギ属内は、これまで考えられてきた分類とは異なる形で二つのグループに分かれました。このように分子系統学的な研究成果は、これまでのヤナギ科の系統分類に新しい見解をもたらす事になりました。

田畑氏は、押し葉標本に基づいた形態形質の多変量解析から、北海道のヤマナラシ類が3つのグループに分けられる考え方を提案しました。これらは、ヤマナラシタイプ、道東・国後タイプ、チョウセンヤマナ

系で3亜属 18節にまとめました。

以上の講演者らの要旨に加え、新しく改訂された日本産ヤナギ属植物の学名リスト、検索表、採集法を付したシンポジウム用資料集を農学研究科の院生が準備して参加者に配布し、大変好評でした。

高橋英樹（研究部教授／植物体系学）



共催企画 「子供雪博士教室」

北大総合博物館では、「子ども雪博士教室」を石川県加賀市、中谷宇吉郎雪の科学館（主催）との共同企画として開催致しました。

開催期間は、平成16年12月25日から28日までの四日間で、美しい雪の結晶が降る大雪山のふもと旭岳温泉へ出かけ、雪遊びや雪結晶のレプリカ作り、また雪洞の中での顕微鏡観察など参加者の方には色々楽しんでいただけました。

今回、中谷宇吉郎雪の科学館の募集で道外から参加された方は、子供が8名でそれに保護者、引率者を含めて13名でした。また、北大総合博物館のホームページを見て参加された札幌近郊の二家族7名や、二日目には地元、東川町から参加された親子16名も加わり、普段は静かな冬の大雪山にも子供達の賑やかなはしゃぎ声が響き渡っていました。

道外からの参加者は、空路で千歳空港に着いた後、電車・バス等乗り継いで夕方には旭岳温泉へ到着し、素晴らしい雪の結晶と対面致しました。



石川県でも雪が降り雪の結晶を見ることは出来ますが、ここ大雪山に来て沢山の降り落ちてくる雪を手袋やコートなどで受け止め、肉眼でも十分に判る雪の結晶に子供たちだけではなく大人の方も感動され、消えては降ってくる雪片をまた受け止め、その美しさに引きずり込まれていました。

夕食の後、持参したいろいろな形のロウソクを使い、スノーキャンドル作りに挑戦をしてみました。

今回、初めて挑戦された方が多く、最初は雪の塊を積むことがなかなか出来ず、何度も積み重ねたものを崩していました。徐々にコツがつかめてくると様々な形のスノーキャンドルが出来上がり、スノーキャンドルのロウソクに火が灯されると雪一面の中に幻想的な光の世界が現れ、参加者の方はその美しさに時間や外の寒さも忘れ、夜遅くまで見入っていました。

観察会は降雪に恵まれ、二日目も朝から静かに雪が降り始め、朝食を済ませ早速観察を始めました。

この日の観察方法は、地元の温泉宿の方が用意して下さった雪洞の内部に、科学館から運んできた顕微鏡や、それに接続してみんなで見られる様にモニター画面なども設置しました。そして、雪洞の外で降って来た雪を採取しては顕微鏡にセットして、雪洞内の温度が上がらないように数人ずつ交代で実際に接眼鏡を覗いたり、モニターに映し出された画像で説明を受けたりもしました。

また、機器を使用して行う観察だけではなく、雪洞の外では黒色のフェルト紙に降ってくる雪を捕らえ、ルーペを使って雪の結晶を見る観察なども行いました。結晶の形や構造が同じ分類であっても、一つ一つの結晶は全てが世界に一つだけのもので

あり、自然が作り出す芸術的な美しさに改めて参加者みんなが驚いていました。

午後からは、参加者全員で雪遊びを楽しむことになり、引率者として参加の山田高嗣氏の発案で、宿舎向かいの斜面で尻滑り、雪中宝探し、また東川町の方が用意下さった“かんじき”(スノーシュー)を使って雪山歩きの体験なども行いました。

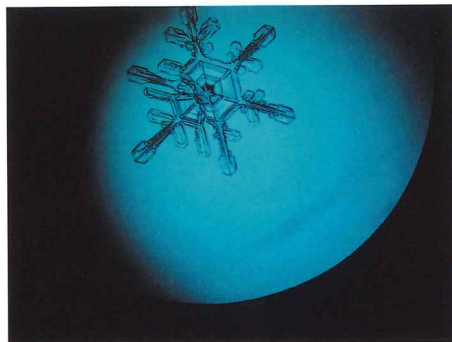
大人にとっても体力を使い切った一日なのに、子供達は疲れも見せず観察会の後も外に出かけ、かまくら作りなどで雪とふれ合っていて楽しんでいました。

最終日は、昼に旭岳温泉を出発し札幌市内への移動となりました。二日間の疲れも見せずに、参加者の方は札幌駅に到着後直ぐに北大総合博物館へ向かいました。

総合博物館では、松枝教授から博物館の説明を受けながら館内を見学した後、昨年の7月にオープンした中谷宇吉郎教室(N123)の復元展示室も見学し、当時の教室の雰囲気を感じ取っていました。

一行は、翌日の飛行機で無事小松空港に戻り、参加者全員には記念品として、今回の滞在期間中に旭岳で作成した雪結晶のレプリカが贈られました。

山崎敏晴 (博物館ボランティア)
松枝大治 (研究部教授/鉱床学・鉱物学)



客員教授紹介

総合博物館では、平成17年1月15日より同年5月15日まで(約4ヶ月)の間、第10代客員教授としてロシア連邦からBarkalov V. Y. 教授を招聘しました。滞在中は「千島列島・サハリン・北海道のヤナギ属植物:分類と分布」を主要研究課題として、総合博物館及び本学関係研究者等との共同研究を展開しました。同氏は東北アジアの維管束植物の分類地理学について活発な研究活動を行っており、極東ロシア、カムチャツカ半島、サハリン、千島列島などのフィールド経験も豊富で、



特に日露間での学名の不一致問題を解決する上で重要なロシア側の分類学研究者と言えます。今回の滞在中にも、総合博物館の維管束植物標本庫の多くの標本についてロシア側の同定見解を標本上に記してくれました。

4月16日には総合博物館第11回公開シンポジウムとして「ヤナギ科植物の系統・分類・学名」を開催し、研究結果を発表してもらいました。

氏名: Barkalov Vyacheslav Yurievitch
専門分野: 植物分類地理学
略歴: 1954年ロシア連邦クルスカヤテリトリー生まれ

ウラジオストック極東大学卒業、ロシア科学アカデミー極東支部生物学土壌学研究所大学院修了、トムスク大学よりPh.D取得、ロシア共和国高等資格審査委員会よりDr. Sci.取得

現在、ロシア科学アカデミー極東支部生物学土壌学研究所首席研究員

高橋英樹 (研究部教授/植物体系学)

6年10月から平成17年3月までにおこなった各種セミナー

北大総合博物館セミナー 土曜市民セミナー
に社会が生まれたのか」
(農学研究科・教授)

9月9日(土曜日)13:30～15:00
40名)

北大総合博物館セミナー

COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー
「ツカ半島の気候と氷河」
(理学研究科・COE研究員)

9月23日(土曜日)13:30～15:00
60名)

北大総合博物館セミナー

シンポジウム 文部科学省科研費補助金特定領域研究(2)(代
表要/中央大学)

北海道大学総合博物館・北海道考古学会・青森県考古学
会 古代学協会
「アイヌへ」

9月13日(土曜日)～14日(日曜日)

北大総合博物館セミナー

COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー
「民族集団の集団遺伝学～その起源と類縁関係について」

(理学研究科・COE研究員)

9月27日(土曜日)13:30～15:00
50名)

北大総合博物館セミナー 土曜市民セミナー

「クサを食べている？」

(北方生物圏フィールド科学センター・副センター長)

9月11日(土曜日)13:30～15:00
50名)

北大総合博物館セミナー

COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー
「金属地下資源」

(理学研究科・COE研究員)

日時：12月18日(土曜日)13:30～15:00
(参加者約45名)

第84回 北大総合博物館セミナー 土曜市民セミナー
「バレイショの芋とアサガオの花」

吉原照彦(農学研究科・教授)

日時：1月8日(土曜日)13:30～15:00
(参加者約60名)

第85回 北大総合博物館セミナー

21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー
「系統発生と個体発生—動物はどこまで再生できるか」

柄内 新(理学研究科・助教授)

日時：1月22日(土曜日)13:30～15:00
(参加者約70名)

第86回 北大総合博物館セミナー 土曜市民セミナー

「新エネルギーの可能性」

伊藤雄三(情報科学研究科・助手)

日時：2月12日(土曜日)13:30～15:00
(参加者約50名)

第87回 北大総合博物館セミナー

21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー
「微化石でさぐる過去の気候・環境変動」

西 弘嗣(理学研究科・助教授)

日時：2月19日(土曜日)13:30～15:00
(参加者約90名)

第88回 北大総合博物館セミナー 土曜市民セミナー

「里川学入門～ザリガニ取りで学ぶ水辺の環境保全～」

川合唯史(北海道原子力環境センター)

日時：3月5日(土曜日)13:30～15:00

第89回 北大総合博物館セミナー

21世紀COE「新・自然史科学創成」総合博物館・市民セミナー
「野外鳥類個体群の遺伝的特徴を保全する」

長谷川理(地球環境科学研究科・研究生)

日時：3月19日(土曜日)13:30～15:00
(参加者約70名)

での企画展ポスター



平成16年10月から平成17年3月までの主な出来事

平成16年

- 10月4日 台湾地球科学研究所葉学文教授来館(10月11日まで)
- 10月8日 北海道滝川高校生徒見学(280名)
- 10月14日 愛媛県新田高校生徒見学(77名)
- 10月18日 韓国嶺南大学教職員研修(7名)
- 10月26日 第16回企画展示「人々の暮らしとオシラサマ信仰」(11月14日まで)
- 10月30日 札幌大学学芸員課程博物館見学実習(39名)
- 11月1日 南アフリカ・ヴィットバーターズランド大学長一行見学(3名)
- 11月13日 公開シンポジウム「蝦夷からアイヌへ」(11月14日まで)
- 11月17日 北海道地区国立大学法人等技術職員研修(60名)
- 11月23日 第17回企画展示「北大写真部 日常展～身近な風景」(1月10日まで)
- 12月10日 内閣府総合科学技術会議事務局一行見学(2名)
- 12月16日 サハリン州郷土博物館長一行見学(6名)

12月25日 (財)日本科学技術振興財団サイエンスキャンプ一行見学(16名)

平成17年

- 1月11日 国立大学法人等幹事協議会北海道支部会一行見学(26名)
- 1月15日 第10代客員教授バルカロフV.Y.博士(生物学)着任
- 1月25日 第18回企画展示「北大写真同好会2004年作品展」(2月13日まで)
- 2月17日 文部科学省研究振興局学術企画室一行見学(3名)
- 2月22日 総合博物館入館者数15万人達成
- 2月22日 人事院給与局給与調査官一行見学(2名)
- 2月23日 (社)北海道国際農業交流協会一行見学(9名)
- 2月26日 第19回企画展示「道具が伝える日本人の知恵とかたち展」(3月27日まで)
- 3月9日 朝鮮大学校博物館長一行見学(4名)
- 3月10日 在日オーストラリア大使一行見学(2名)
- 3月18日 オークランド大学副学長一行見学(5名)
- 3月23日 内閣府大臣官房審議官一行見学(4名)

お知らせ

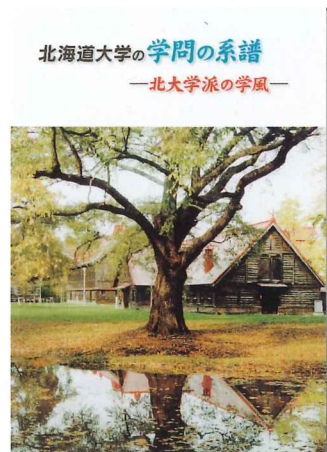
- 第20回企画展示「内田正練とその時代ー日本にクロールがもたらされた頃ー」が4月5日から6月5日まで開催されました。
- 第21回特別企画展示「シベリア・マンモス展」が7月2日から8月27日まで開催されています。
- 第22回企画展示「明日へ Tomorrow展」が7月5日から7月31日まで開催されています。
- 第23回企画展示「フラメンコー人生を唄い、奏で、踊ることー」が7月20日から8月7日まで開催されています。
- 第24回企画展示「新着標本展：チョウとガに魅せられた研究者たち」が8月2日から9月4日までの予定で開催されます。
- 第25回企画展示「アンモナイト展」が8月9日から9月4日までの予定で開催されます。

お礼

以下のボランティアの方達に、学術標本作製・展示解説・企画展示準備・ボランティア運営等で協力いただきました。謹んでお礼申し上げます(平成16年10月～平成17年3月)。
植物標本(市民)：今村ひろこ、小池武子、小淵修子、金上由紀、桂田泰恵、久志本アイ、黒田シズ、高橋美智子、高橋陽子、竹林順子、近久喜枝、干坂瑞希、引地輝代子、矢島慶子、与那覇モト子。
植物標本(学生)：佐藤広行、村上麻季、井澤岳師、宮澤誠治、田畑倫子、加藤ゆき恵、持田誠、A.K.M. Golam Sarwar、小林孝人、Erni Susanti、Maria Stefanie、星野フサ、武田千恵子。
昆虫標本：久万田敏夫、梅田邦子、大島一正、小林憲生。
古生物学：望月直、相原大介、中野系、蛭田明宏。
考古学：笠原明子、前田志乃、長屋恵、佐野央馬、鈴木理沙、ロバート・クルツ。

鉱物学：鳥本准司、山崎敏晴、藤川修、永富真紀子、饗聡子、橋本知也、高橋亮平。
展示解説：清水良平、塚本精蔵、岡田美佐子、上田若菜、長谷睦。

- 『改訂版北大エコキャンパス読本ー植物編 付 鳥類リスト』が、本学16年度プロジェクト研究経費により、平成17年3月に出版されました。
- 藤田正一館長編集の『北海道大学の学問の系譜ー北大学派の学風ー』が、本学16年度プロジェクト研究実施経費により、平成17年3月に出版されました。



北海道大学総合博物館ニュース 第11号

北海道大学総合博物館ニュース
編集：高橋英樹・松枝大治
発行日：2005年(平成17年)7月・発行者：藤田正一
発行所：北海道大学総合博物館
住所：060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
電話：011-706-2658・FAX：011-706-4029
E-mail: museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp
http://www.museum.hokudai.ac.jp/
印刷：株式会社アイワード